



— 海外研修報告 —

(I) 研修の目的

“現代美術に於ける膠彩画”が根本のテーマである。美術作品が生れりということは、その国、その地域、そしてその民族の永い歴史にその根本があるということも否定することは出来ない。

現代美術に於ける表現方法として、その新しい方向を見い出すためには、その根底にある精神の伝統を理解することが肝要である。

各国公立美術館、博物館を中心に、地域の美術館、博物館に蒐集された文化遺産こそが、その国、あるいはその民族の生活観、美意識が最も強く表われているものである。そしてそれらを詳しく観察し、現代美術にどのように反映させられるかの比較検討することが研修の目的である。



(Ⅱ) 研修の方法

- ・ 現地作家のアトリエ・工房での研修。
- ・ 美術館、博物館の見学。
- ・ その他。

(Ⅲ) 研修日程

平成 18 年 10 月 26 日から 平成 19 年 1 月 15 日まで フランス、モロッコ、ポルトガル、イタリアで上記の方法により研修。

(Ⅳ) 研修地及び研修場所

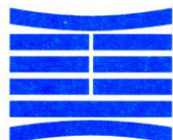
< 国・研修地(市・町・村)及び研修場所 >

研修地(所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
フランス	・ カニユ, ・ アンティグ, ・ ヴィオット,	・ ルイブル最晩年のアトリエ, ・ ピカソの城,(休館) ・ ガラス美術館,



多摩美術大学

研修地 (所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
	・サンポール・ド・ヴァルス, ・エクサン・プロヴァンス,	・マージュ財団 コンテンポラリー美術館, ・エクサン・プロヴァンス 市庁舎,
モロッコ	・カーサ・ヴァンカ, ・メクネス, ・フェズ, ・ミデル, ・エルフード, ・リッサニ, ・フルザザード, ・ティネレ, ・マラケッシュ,	・ハウサンⅡ世のモスク, ・マンスール門, ・ヴォルギリス遺跡, ・メディナ (旧市街), ・ブイナニア神学校, ・なめし皮工房, ・織綴工房, ・バルベル人のテント村, ・サハラ砂漠ツアー, ・カスバ見学, ・オアシス, ・大理石彫刻工房, ・ダルシサイド美術館 ・マラケッシュ美術館 ・メディナ (旧市街)



多摩美術大学

研修地 (所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
ポルトガル	・リスボア,	・ グルベンキアン美術館, ・ 国立アスレージョ美術館, ・ 国立古美術館,
	・ エヴォラ,	・ カテドラル, ・ エヴォラ美術館, ・ エヴォラ大学, ・ ディアナ神殿,
	・ コインブラ,	・ 旧コインブラ大学, ・ サンタクルス修道院, ・ 新カテドラル, ・ 旧カテドラル,
	・ ポルト,	・ ソアレス・ドス・レイス 国立美術館, ・ 国立近代美術館, ・ 墓地,
イタリア	・ ナポリ,	・ 市街地及び漁村,
	・ ローマ,	・ ローマ国立博物館(マッ ジモ宮. アルテンプス宮)

研修地(所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
		・ カピトリニ美術館,
		・ フォロ・ロマーノ
		・ サンピエトロ・イン・ヴァン
		コリ教会,
		・ バンテオン
		・ ヴィラ・ジュリア・エトリスコ
		美術館,
		・ 国立近代美術館,
		・ サン・ピエトロ大聖堂,
		・ ヴァチカン美術館,
	・ アリウチア,	・ ラッゲ・セコンド・カルーツ
		氏アトリエ,
	・ タルキニア,	・ 国立タルキニア博物館,
		・ ネクロポリ地下墳墓
		群,
		・ サンタマリア・デ・カステッ
		ロ教会,
		・ コシミ・ジュリオ氏彫
		刻工房,
		・ その他,



多摩美術大学

研修地(所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
	・ フィレンツェ,	・ サン・マリア・デル・フィオーレ教会 (ドゥオーモ)
		・ 洗礼堂,
		・ ドゥオーモ付属美術館,
		・ ヴェッキオ宮,
		・ ウフィツィー美術館,
		・ パラティーナ美術館,
		・ メディチ家礼拝堂,
		・ メディチ・リッカルディー宮,
		・ サン・マルコ美術館,
		・ アカデミア美術館,
		・ サンタ・クロチエ教会,
		・ サンタ・マリア・ノヴェッラ教会,
	・ ミラノ,	・ スフォルツェスコ城市立美術館,
		・ サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会,
	・ ヴェネツィア,	・ アカデミア美術館,
		・ ラテラーノ宮,



研修地 (所在地)		研修機関
国	市・町・村	研修場所及び機関名
		・サン・マルコ大寺院, ・ハギー・ブッゲンハム美術館, ・ドゥカーレ宮殿, ・海洋博物館, ・サンタ・マリア・マジョーレ教会, ・サン・ジョルジョ・マジョーレ教会, ・サン・ガッカリア教会, ・サン・フランチェスコ教会, ・サンタ・キアラ聖堂, ・サンタミアーノ教会, ・カルチエリの庵, ・オルヴィエート, ・ドゥオーモ,

(V) 研修内容及び成果

“膠彩画”という我国独自の絵画形態をもって異文化の中に入ることの困難さを身に浸



みて感じる研修の旅であった。

10月26日に日本を發ち、先ずフランス・エクス
ンブローヴァンスと基点に1週間程度のウォー
ミングアップを試みモロッコへ入った。

モロッコは私にとって全く未知の世界である。
先ず言葉の障害に茫然と佇む場面が連続
でほとんど困った。研修地を廻る交通手段
を選ばなければならない。日本での情報で
は、鉄路にしろ、空路にしろ、路線バスに
しろ、定時に、正確に、そして効果的に移動す
ることは無理ではないか。限られた短い時間
を考えると日本のように時間には正確な交
通手段は望めそうもない。フランス語の堪能な
知人に通訳を頼みフランスの旅行会社が企画
したフランス人向けのバスによるツアーに参加する
ことにする。コースを検討した結果、一応こちら
が目的とする場所はカバー出来ている。全行程
11日間の旅だ。

モロッコの暮し — モスクのタイル装飾には感動
する。イスラム文化の持つ力とは日本人である我々
には想像を遥かに超えた耐久力とそれを維持
するパワーは何処から来るものなのか。湿潤な
情緒を好む我々日本人の文化とは全く異なる

ものである。

陶器、鉄器などの文様に於いても、モチーフは身近かな動物、植物を題材にしてはいるが、その表わされたものは全く抽象的な形なのである。日本に於けるこれとは大きな違いである。

“砂漠”という“絶対”に対処して生きるということの証しであらうか。幾可形態の持つ意味がそこに在るように思える。

マラケシュ美術館では特別展として100年前のイギリス人写真家の撮影による写真展が開催されていた。100年前のモロッコの人々の暮らしと現代のモロッコの人々の暮らしの違いは殆んど無く敢えて言うならば裸足の暮らしとパフォーシュかあるいはゴムの草履を履いているかの違いかというくらいで殆んどその生活の様相は変わっていない。ゆっくりとゆっくりと時間が流れているのである。そのことに格別な驚きと感銘を受けただけであった。砂漠の中の小さな村のカスバに暮らす人々の各家々の窓には一軒残らず“ハラボラアンテナ”が付いているのである。テレビというメディアによって嵐のように押し寄せて来る西欧文明の波に

一向に流されることなく頑固に自国の文化、生活様式を崩さないモロッコの人々の中に永々と引き継がれている精神的基盤の厚さに強く尊敬の念を抱いた。

12月1日、イタリアに入り、早速 タルキニアでの研修の準備を始めた。約30年前、文化庁芸術家在外研修員として一年間過ごした懐かしい町である。

先ずローマ・アリウチアのラウジ・セコンド・カルーツ代のアトリエを訪ね 現在のタルキニアの状況などを聞き又イタリアの現代美術家の様子などを^{ぶか}悉くに見、仕事などを挟んで有意義な時間を持てたことは大きな喜びであった。その時の話として「タルキニアの地下墳墓は全々非公開になっており、我々ローマの大学の人間でも中に入ることは出来ない」ということを知らされた。“なんと言うことか”私の今回の研修の最大の目的は、その地下墳墓に描かれた紀元前6世紀から7世紀にかけてエトルリア人が遺した壁画 それを見ることにあったのである。

とにかく美術館に保管してあるいくつかの壁画だけでなくしっかりとじっくりと見ることにしてタ

ルクイニアに向った。

ルクイニアに家を借りた。ここをベースに1ヶ月半 研修地への移動の基地とするためである。

早速、彫刻家 コシミ・ジュリオ氏の工房を訪ね旧交を暖めた。彼は私が30年前にここへ来た時にはまだ12才の中学生だったのだった。今や個展を開きローマ彫刻の技法書をも執筆しているのである。感慨もひとおである。彼の友人のアトリエをいくつも紹介されその後親しく交友を結ぶことは今回の予期せぬ収穫であった。中でもギリシャの赤絵、黒絵の技法を研究している画家のアトリエでは猪のたてがみの毛一本を用いて作った筆、約10cmから12cmの毛の長さの筆で線を引く技法には新鮮な驚きと共に感動したのである。この他に山羊の鬃、猪の鬃などで作る筆など、日本では到底見ることは出来ない筆である。

今回の研修、特にイタリアでの研修の際、多くの芸術家達との交流の中で特に強く印象に残ったことは誰もが芸術至上主義だけに終止せず 最後には必ず 現在の政治経



済の話題になるということである。消費税についてほもとより、イタリア、フマリユーロに統合されて以来の物価の高さについてであつたり...。今イタリアで最も高額なものは、家屋、自動車、そして電気料金である。特に電気料金については EU・ユーロ統合の頃イタリアは超インフレ経済で末期的な状況であつた。大統領は国民に努力を呼びかけ、そして我慢することを説いた。丁度その折、ロシアが電気の元売り価格の値上げをセマッタ。ロシアからの全面的輸入に頼つていたイタリア政府は異議を申し立てた。ところがロシアはそれに対して「ならば電気の供給をしない」という。イタリア政府は全国民に問うた、「自力で電力を持つには原子力発電しかない」と...。国民の答えは NO! である。ロシア政府は早速強行な手段に出て電気の供給を止めた。イタリア全土が停電したというニュースはまさに記憶に新しい。再び政府は国民に問うた。国民の答えはやはり NO! である。電気料金が高くなることより原子力発電所を持つことに反対したのである。イタリア国民の見識と良識に感服し、かつ日本人もこう

ありたいものと切に願ったのである。
1月に入り 帰国の日も近づくか或る日、思いも掛けなかったネクロポリの地下墳墓の壁画が見られるという知らせが入った。もう地下墳墓の中に入ることは無理だと諦めていたところだっただけにその驚きと喜びは大きい。

タルクニアの美術館の館長の計らいで、現在は定年退職した学芸員が案内して呉れるという。地下墳墓一期でもよい、見る事が出来るならこれほどの喜びはない。

朝 9時から始まり、終わったのは午後2時を過ぎていた。昼食は抜きである。カンターレ(歌うこと)、マンジャーレ(食べること)、ドルミーレ(眠ること)、を人生の旨とするイタリア人には想像出来ない、信じられないことである。このイタリア人学芸員の熱意に心からの感謝を表したい。
今回、見学出来た地下墳墓は以下の通りである。

- ・トンバ・デイ・トーリ,
- ・トンバ・デッラ・カッチャ,
- ・トンバ・デリ・アウグーリ,



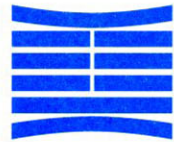
- ・ トンバ・デッ・バローネ,
- ・ トンバ・デイ・レオバルディ,
- ・ トンバ・デリ・スクーディ
- ・ トンバ・デッ・ティフォーネ
- ・ トンバ・デイ・ジョリエーリ
- ・ トンバ・デッレ・レオネッセ

なんと9基もの地下墳墓の中に入り、つづきにはその壁画を視ることが出来たのである。一度閉鎖された遺跡が再び開放されるということは先ず考えられない。今後私の人生の中で二度とは無いであろう貴重な研修であった。

(Ⅶ) 終りに、

今回の海外研修で4ヶ国、28市町村、78箇所を廻った。体力の限界はとうに越えていた。しかしこれだけの期間、チャンスと与えられた私は幸せ者である。

このような機会と与えて戴いた多摩美術大学に心から感謝申し上げる。



多摩美術大学

(15)

多摩美術大学 日本画科 教授

戸田 康一